

「京都・学びの文化」体験ツアー 実施報告

齋藤 佳津子・猿山 隆子・人見 麗子・
宮崎 朗子・渡邊 洋子

A Report on Co-ordinating the 'Study Tour
on the Learning Culture in Kyoto'

Katsuko SAITO, Takako SARUYAMA, Reiko HITOMI,
Roko MIYAZAKI, and Yoko WATANABE

1 はじめに

2004年9月17-19日、同志社大学において、日本社会教育学会第51回研究大会が開催された。準備作業にあたっては、同大学内の大会開催事務局に加え、京都生涯学習研究会や近隣の大学関係者などが実行委員会を組織した本生涯教育学講座でも、教員と院生たちが運営・研究面で積極的にいくつかの役割を担った。

通常、国際会議などでは、大会期間中に、学会のテーマや論点に関わる「スタディ・ツアー」や「エクスカージョン」が準備されることがよくある。同学会では、従来この種の試みはほとんどなされてこなかったが、「社会教育学」の実践的性格と「京都での開催」の意義とを踏まえ、この機会に、京都という土地柄を活かした新たなフィールドワーク的な試みをするを提案した。実行委員会です承を受け、「学びの文化」研究会のメンバーから有志を募って、その企画・実施を担当することにした。

「学びの文化」研究会は、2003年秋から活動を始め、茶道など趣味・習い事を中心とする体験報告や文献講読、能楽の予備学習会と能楽鑑賞会への参加、友禅染の工場や工房を中心としたフィールドワーク、職人の「わざ」や「学び」に関する文献講読などに取り組んできていた。それらを踏まえ、京都を足場とした「学びの文化」への問題関心を、いわゆる観光地をまわって成果や結果を「見る」ツアーではなく、そのプロセスや関係者（裏方にいる人）に会って、その実際に触れ、話を「聴く」体験型のツアーの企画・実施という形に集約して活かさないだろうか、というのが、当初の構想であった。

「京都・学びの文化」体験ツアーは、このような中から、発案されたものである。ツアーの柱は、①時代が変化する中で「変わらない」「花街」の世界における、舞妓・芸妓の養成や「修行」の実際に触れること、②京都ならではの伝統的な職人の「わざ」の成果と実際を通して、職人の世界に触れること、③地域の人々が「学校づくり」に関わった歴史に触れることで、学区制が人々の生活や意識に根ざす京都の独自性を知ること、④京都の職人や「ものづくり」の現状と課題を知り、新たなチャレンジ（体験工房やアンテナショップ）の可能性に触れること、などである。JTB 京都支店の担当者空谷頼将さんに趣旨をご理解いただき、実務的な交

渉をお願いし、訪問場所の選定や内容面での具体的な依頼・交渉はすべてメンバーで行った。ただ慣れないこともあり、参加者確保については積極的な取り組みをすることができなかった。

なお、同ツアーは、生涯教育学講座の前平泰志教授がコーディネートした本大会の公開シンポジウム「『ローカルな知』の可能性—もうひとつの生涯学習」と連動する企画として位置づけられたことを、申し添えておく。

本報告は、この実験的な試みについて事実経過を記録化するものであり、ツアー当日の概要に加え、当日配布のパンフレット掲載事項の再録、参加者とスタッフメンバーの感想等を含むものである。企画・実施担当のメンバー自身がツアーを総括するのみならず、今後の同種の活動への示唆と議論の手がかりを少しでも提供できれば、と考えている。短時間の中で、参加者にとって有意義な機会になり得たかどうかなどを自問しつつ、振り返ってみたい。(渡邊)

2. ツアー当日の流れ

ツアー当日は、気持のよい晴天に恵まれた。参加者30名、ツアー企画スタッフ5名は、12時30分に同志社大学の寒梅館前から、マイクロバスで出発した。

最初の訪問先は、京都最古の花街である上七軒の歌舞練場である。直前まで、歌舞練場の内部にある上七軒協同組合・上七軒歌舞会事務局長の瀬戸一男さんのお話のみを伺う予定だったが、当日、舞妓さん(梅ちかさん)にもご協力いただけることになった。舞妓さんの口から直接に、修行の日々やお稽古の実際、心構えなどについて聞くことができ、私たちの日常生活からは想像できない舞妓さんの「学び」の世界をかいま見ることができた。お二人には、どんな質問にも、丁寧にお答えいただいた。お話の後、上七軒の芸舞妓のお稽古場「検番」とお披露目の場である「歌舞練場」を案内していただき、2時間ほどを過ごした。

次の訪問先は、財団法人ギルドハウス京菓子・京菓子資料館である。ここは京菓子老舗が設立した京菓子文化の創造的な資料館で、学芸員がいる。まずは、資料館の3階で、京菓子職人の方にいくつかの菓子を実演して頂きながら、京都の風土を表現する繊細な技術についての説明をしていただいた。その後、参加者全員が、実演で見た京菓子作りを体験することになり、職人の方に教わりながら取り組んだ。見様見真似で京菓子作りに挑み、とても器用においしそうなものを作る参加者、独創性に溢れるものを作る参加者もいて、それぞれの作品を見ながら、笑い合い、にぎやかな体験となった。その後、2階に下りて、京菓子に関する資料の展示を見学した。ここには、全国展に出品された大きく見事な京菓子の創作品、昔からの菓子を作る道具や四季折々の京菓子を描いた本などが展示されている。その後は休憩も兼ねて、1階の茶室で京菓子とお茶をいただいた。

次は、京都市学校歴史博物館を訪問した。日本近代学校教育発祥の地である京都の教育の歴史と、町衆と学校との関わりを示す資料が展示されている。それらを学芸員の方に解説していただいた。時間の関係で、番組小学校ができるまでの時期にしばって解説していただき、その後、参加者が自由に見学した。ここでは、町衆のまちづくりと学校に対する強いこだわりや思い、そして地域住民の生涯学習的拠点としての京都の小学校の原点などを知ることができたのではないだろうか。

最後に、京友禅体験工房の丸益西村屋を訪問した。ここは、京友禅型絵工房として、旅行者、修学旅行、小・中学校の総合学習に利用されることも多いところである。染色の伝統工芸士でもある丸益西村屋の店主、西村さんに、生い立ちから職人時代、体験工房を開くまでの道のり、染色の世界、後継者の育成の現状、京都の「ものづくり」の今後の展望などのお話を聞くことができた。活発な質問も出され、企業の経済論理と「ものづくり」一辺倒だった職人の世界の論理の違い、そのための苦労や工夫、近年、職人に求められるようになった役割や資質などに、丁寧に答えていただいた。その後、工房内や新たに開店した工芸品のアンテナショップを案内していただき、見学した。

18時頃、祇園付近で解散した。ツアーの日程はここで終わりであったが、解散後、多くの参加者は連れだって、祇園の町並みを楽しんだ。

3. ツアーの概要（特に断りのない限り、当日配布パンフレットから転載）

(1) ツアーの旅程と訪問先の位置

〈旅程〉

同志社寒梅館前（次ページ地図中の①）



上七軒（同②）



財団法人ギルドハウス京菓子・京菓子資料館（同③）

京都市上京区烏丸通上立売上ル



京都市学校歴史博物館（同④）

京都市下京区御幸町通仏光寺下る橋町437番地



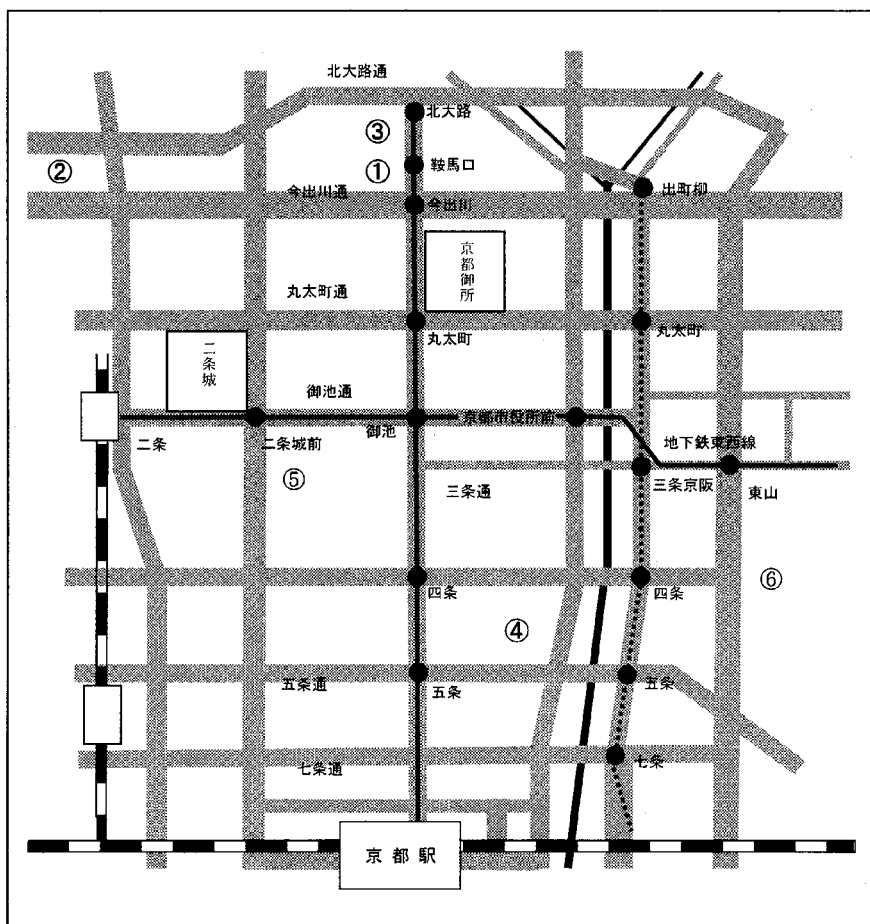
丸益西村屋（同⑤）

京都市中京区小川通御池南入る



祇園 解散（同⑥）

「京都・学びの文化」体験ツアー 地図



(2) ツアー訪問先について

a 京都の花街・上七軒

【お話しいただいた方：上七軒お茶屋協同組合・上七軒歌舞会事務局事務長

瀬戸 一男さん】

京都の「五花街」の一つである上七軒は、京都最古の花街である。15世紀中頃の室町時代、將軍足利義政の時代に北野天満宮が一部焼失し、修造作業中に残った材料を払い下げてもらい、7軒のお茶屋を建てたのが上七軒の起源である。17世紀には花街として発展した。

現在、上七軒には、お茶屋は11軒あり、芸妓14人、舞妓7人、仕込みさん5人を擁する。

上七軒の芸舞妓のお稽古場である検番では、舞、小唄、お茶、長唄、鳴り物、笛、常磐津、清元の8科目を教えている。

4月15日～25日には上七軒の歌舞練場で「北野をどり」が開催される。

〈参考〉 <http://www.digi yarn.com/ichi/index2.html>

*企画スタッフ事前訪問記録（ツアーの事前打ち合わせ時の聞き取りメモ）：

花街の仕組み（上七軒）

◆お茶屋さん・お茶屋 ― 芸舞妓の仕事場のようなものである。

- ・上七軒ではお茶屋さんが置屋さんを兼ねている（他の花街では、お茶屋さんと置屋さんは別のもの）。
- ・仕込みさん、舞妓さんが住み込んでおり、授業料や生活費、着物代などすべてをお茶屋さんがもつ。

◆仕込みさん

- ・舞妓さんになるために芸を学ぶ。まだ一人前ではない。
- ・現在、5人（上七軒）。
- ・近年は地方から希望する者が多く（インターネットなどを見て）、京都出身者はほとんどいない。
- ・中学校卒業以上。
- ・お茶屋さんに住み込みをする（普通は置屋さんに住みこむが、上七軒ではお茶屋さんが置屋さんも兼ねているため）。
- ・授業料や生活費などは、あずかっているお茶屋さんがもつ。

◆舞妓さん

- ・中学卒業以上、15歳～20歳くらいまで。
- ・お茶屋さんに住み込みをする（月給がない）。
- ・「年（ねん）を切る」（5年）＋「お礼奉公」（1年）＝6年で芸妓さんになる。
（年季の途中で芸妓さんになれることもある）
- ・通常、仕込みさんから舞妓さんになるが、仕込みさんから芸妓さんになることもある。
（例えば、身長が高すぎる、年齢が20前後である、などの場合）

◆芸妓さん

- ・現在、14人。→地方（じかた）5人、立方（たちかた）9人。
- ・年齢制限はない。
- ・芸妓さんは、年（ねん）が切れるため、独り立ちをする。
お茶屋さんを出て、自分で生活をする。（個人事業主）
- ・年齢の若いうちは、立方（舞専門）であり、年齢が上がるにつれ、地方（伴奏）へと役割を変えていく。（地方さんの方が格上である。）
- ・お茶屋さんを通してお座敷に出る。どこのお茶屋さんのお座敷に出てもよいが、住み込んだお茶屋さんへの義理立てはする。

◆授業について

- ・ 8科目（舞、小唄、お茶、長唄、鳴り物、笛、常磐津、清元）ある。
- ・ 毎月、8科目を4日間ずつ授業がある。
（いつ、どの授業があるかは、授業を行う先生の予定次第である）

b 財団法人ギルドハウス京菓子・京菓子資料館

【実演・お話をいただいた方：京菓子職人 塚本 英樹さん】

財団法人ギルドハウス京菓子・京菓子資料館は、京菓子の老舗である「俵屋吉富」が京菓子の伝統の技術を後世に伝えるためにと、京菓子文化の総合的な資料館として昭和53年に設立した。和菓子全般の資料や日本の菓子に関する文献、京菓子作りの道具類、什器類、絵画などが展示されており、日本の菓子文化の歴史を知ることができる。

〈参考〉 <http://www.kyogashi.co.jp/top.html>

* 企画スタッフ事前訪問記録（ツアーの事前打ち合わせ時の聞き取りメモ）：

◆和菓子職人について

- ・ 職人として働き始めるのは18歳～。
（昔は中学校卒業してすぐの人が多かった）
- ・ 10年～20年前までは職人を希望する人が多かったが、だんだん少なくなってきた。
（俵屋吉富では、最近は職人を募集していない）
- ・ 職人を希望して来るのは、昔は和菓子屋の跡継ぎなどであったが、現在は、一般の人が多くなってきた。
- ・ 修業の年数（一人前になる）は人によって異なる。2、3年の人もあれば、7、8年の人もいる。
（昔は「餡炊き3年」といっていた）
- ・ 和菓子職人は、茶道や華道の知識が必要である。そのため、職人は、茶道、華道の勉強に行っている。
- ・ 和菓子職人の技術については、昔は「技をぬすむ」といったが、今は一般の人が職人として入ることが多いこと、味を一定に保つという理由から、「マニュアル」がある。
「技をぬすむ」ことと「マニュアル」の両方で技術を覚える。

c 京都市学校歴史博物館

【解説していただいた方：事業課業務係 学芸員 竹村 佳子さん】

京都市学校歴史博物館は、京都の教育の歴史と、その学校の創設・経営を担った町衆の熱意を、学校ゆかりの美術工芸品や歴史資料によって明らかにし、これを後世に伝えるとともに、市民の生涯学習や子どもたちの学習活動に役立てる施設として、平成10年11月に開館した。

京都では、明治2年に全国に先駆けて、町衆の力によって、自治組織「番組」と呼ばれた学区単位で64校もの番組小学校が設立された。番組小学校は、学校としての機能だけではなく、

地域社会のコミュニティセンター的な役割も果たしていた。京都の教育は町衆の力によって作られ、その地域文化や学校を大切にする情熱は、現在にも引き継がれている。

〈参考〉 <http://www.gakurehaku-unet.ocn.ne.jp>

*企画スタッフ事前訪問記録（ツアーの事前打ち合わせ時の聞き取りメモ）：

◆内 容

- ・京都独自の学校制度

明治2年 町衆が中心となり、自治組織「番組」と呼ばれた学区単位で64校もの番組小学校が設立する。（学制が公布される3年前）

↓ ↓

今につながる地域の人々の学区へのこだわり

- ・小学校を維持するために小学校会社を設立する。
- ・地域の中での学校の役割

教育の場としてだけでなく、地域のコミュニティーセンターのような役割も果たしていた。

d 京友禅体験工房・丸益西村屋

【お話しいただいた方：染色伝統工芸士 丸益西村屋 店主 西村 良雄さん】

京都の文化や技に触れて貰いたいとの思いから、古い町屋を改造して開いた工房である。ここでは、京友禅型絵が体験できる。今回は、染色の世界の現状やその問題点について、また、京都ならではの町おこしや物作りの文化の再生についてなど、染色の世界を通して見た現在の京都の伝統技術、伝統文化に関するお話を伺う。

〈参考〉 <http://www.kyo-komachi.com/index.html>

*企画スタッフ事前訪問記録（ツアーの事前打ち合わせ時の聞き取りメモ）：

◆染色の世界の現状と問題点について

- ・現状では、染色の世界はビジネスとしての行き詰まりがある。

生活に密着したものは商売として成り立つが、着物に関するものは商売として成り立たなくなっている。

- ・職人については、現在の職人は60歳すぎがほとんどである。

商売として成り立たなくなっているため、現在、「後継者の養成」という段階はすぎたのではないかと懸念されている。

- ・西村屋は、染色が商売として成り立たないこと、町おこし、物作りの文化の再生、という観点から、観光業に行き着いた。

（西村さんは、商工会議所などで、新しい京都の観光、町おこし、文化の再生という観点から講演をされている。）

（以上、猿山）

4. 参加者の感想とスタッフの報告・まとめ

(1) ツアーの感想

日本社会教育学会の『学会通信』(No. 173 2004.12)「第51回研究大会報告号」に、「京都・学ぶの文化」体験ツアーに参加して下さった新潟経営大学の中島純先生からツアーの感想を寄せていただいた。以下、中島先生のご了解を得た上で「学会通信」から転載する。

「京都・学びの文化」体験ツアーに参加して

中島 純 (新潟経営大学)

京都を訪れるのは中学校の修学旅行以来である。ツアーの内容を『学会通信』の紙面で知るや、期待をふくらませて、研究大会の参加を決めた。同志社大学をバスで発ち、最初に訪れたのは、「上七軒」という京都最古の花街にある歌舞練場である。芸舞妓のお稽古場で、お茶屋組合の事務局の方と稽古を終えた新人の舞妓さんから話を聞く。日本髪に浴衣姿の舞妓さんの「習うより慣れる」「芸は盗むもの」という言葉が印象を結ぶ。つきに向かったのが、「京菓子資料館」である。ここは京菓子老舗が設立した京菓子文化の総合的な資料館で、菓子職人の実演とお話しのあと、参加者も見様見真似で菓子作りに挑戦した。視覚と味覚の調和した繊細な味わいは精巧な職人芸から生まれることを実感する。そして、三つ目の訪問先「学校歴史博物館」へ向かう。小学校跡地にあるこの施設は開智小学校の校舎を使ったもので、空襲を免れた遺品から町衆と学校の関わりの深さを知ることができる。地元京都出身のツアーガイドの一人から、今でも京都のまちに暮らす人は、小学校区がアイデンティティの拠り所になっていると聞く。最後の訪問先が、京友禅型絵工房の「丸益西村屋」である。染色工芸士であり店主の西村良雄さんの話を聞きながら、後継者育成をふくめ伝統を後世に伝えることの難しさを考えさせられる。「京都はまち全体がテーマパークのようだから、地元の人には友禅染をそう有難がらないのです……」と西村さんは語る。解散地の祇園に着いた頃には、すっかりと夕暮れて、灯籠のあかりは、祇園界隈を幻想的に映し出した。地域の生活文化に根ざした技芸の学びは、生業と結びつき、伝統を現代に伝えていく。戦後の社会教育研究が視野に収めてこなかったローカルな〈学び〉のもつ意味について考えさせられた。最後になるが、今回のツアーを企画立案し、周到な準備と行き届いた運営で、充実したものにしてくださった担当スタッフの皆さんに感謝申し上げたい。

(2) スタッフの報告・まとめ

「京都・学びの文化」体験ツアーのスタッフは、ツアーの企画段階から、また、ツアー当日のお話から、各々の問題関心に引きつけて様々なことを学んだ。そこで、企画スタッフのツアーの報告や感想などを掲載する(各メンバーのオリジナリティを重視し、内容的な重複について

は敢えて調整していない)。

① 学会ツアーの企画・実施に加わって

宮崎 朗子

初めての試みとして、日本社会教育学会主催のツアーが実施された。当学会は毎年場所を変えて開催され、多くの方が参加されている。日本各地で開催される当学会に参加することは、参加者にとってその地方の社会教育の現場や文化に触れるまたとないチャンスである。しかし、長い歴史を持つ当学会で、今まで学会主催のツアーがおこなわれていなかったことは、不思議であり驚きでもあった。

他分野ではあるが、海外の学会主催ツアーに何度か参加した経験からすると、学会主催のツアーは、不特定多数の一般参加者をターゲットとしたお仕着せの観光ツアーとは異なり、参加者が共有できる関心事が豊富に盛り込まれており、非常に充実したツアーであることが多い。半日、あるいは一日、同じ物を見聞きしながら共に過ごすひとときは、親睦会やセッションとは違う雰囲気の中での参加者の交流の機会ともなっている。

今回は、ツアー実施スタッフの一員として、微力ながら企画段階から参加させていただく機会に恵まれた。社会教育に関しても京都に関しても素人に近い私にとっては、社会教育の専門家と生粋の京都人のスタッフが中心となって企画が練られ、下検分がおこなわれていく過程を間近に見ることは、教室では学べない形で社会教育が学べる貴重な体験であったと言える。とりわけ舞妓育成の現場は、予想以上に興味をひかれるものであった。古い京都の街中においてさえ珍しいと思えるような、まるでタイムスリップしたような空間で、伝統としきたりを見様見真似で学んでいく現代っ子の姿。「教える/学ぶ」を研究テーマとしている私にとっては、さらに踏み込んでみたい、と新たな関心を覚えるきっかけとなった。

通常、学会主催のツアーは学会終了後に行なわれることが多い。しかし今回は、学会終了の翌日が3連休の祭日にあたり、観光地京都では大渋滞が予想された。そのため、学会前日、それも半日だけという厳しい条件の中での実施を余儀なくされてしまった。限られた条件の中で最大限の効果を生むためには、綿密な前準備が何よりも重要であるとの思いから、スタッフは見学予定場所に何度も足を運んだ。訪問回数を重ねるにつれ、見学されることに難色を示されていた方も、単なる物見遊山ではないとお分かりいただけ、ツアー当日は、こちらの予想以上の対応をしていただくことができた。初めての試みで、学会ツアーの存在自体が学会参加者に認識されていなかったということもあり、ツアー参加者が少なかったのは残念であったが、京都に馴染みのない方だけでなく、京都出身の参加者にも満足していただけたことはスタッフの一員として大変嬉しいことであった。第2回、第3回と、学会開催地独自のツアーが、今後も企画されていくことを楽しみにしている。

② 京都の伝統文化における「学び」——「京都・学びの文化」体験ツアーから——

猿山 隆子

今回、「京都・学びの文化」体験ツアーの担当スタッフとして、企画段階から参加すること

ができた。花街の組合、京菓子の老舗、京友禅の体験工房に何度も足を運び、関係者の方々に話を伺う中で、花街、京菓子、京友禅の世界から、京都の伝統文化の継承・伝承がどのように行われてきたか、その「学び」の一端に触れることができた。また、ツアーに関連して、その他の伝統文化の継承・伝承に関する資料にあたる中で、そうした「学び」の様式の変容もかいま見ることができた。

芸舞妓というと、その華やかさに目を奪われがちであるが、華やかな花街を支える裏には、芸舞妓たちの地道な毎日の芸の稽古や、長い間培われた礼儀作法や儀式、しきたりがある。繊細な京菓子が生まれるまでには、職人たちの長い修業だけではなく、京菓子に関わる茶道、華道の心得なども求められる。美しい京友禅が仕立て上げられるまでには、いくつもの工程に専門の職人たちの技がある。

そうした伝統文化を伝承・継承するための「学び」のスタイルとして、「技をぬすむ」と言われるように実地に身体で覚え、経験が重視されること、また、生活の礼儀作法なども芸や技のうちであることなどが挙げられるだろう。しかし、伝統文化に携わる人々の置かれている状況も、意識も、ライフスタイルの変化とともに、確実に変わっている今、新しい「学び」のスタイルに変化しながら、芸や技を伝承・継承していく方向へと進んでいる。例えば、京都には伝統工芸の専門学校が設立されている。ここでは、学校という形式をとり、ある一つの工芸のことだけでなく、様々な知識を得ていくというように、「学び」のスタイルが変化している。それによって、学ぶ人も、従来の伝統文化を引き継ぐ人びととは異なった人びとが集まっている。また、さまざまな分野と結びついたり、新しい活動の場を求めることで、従来の伝統文化の枠にとらわれず、新しい文化を創造しようとしている。

こうした伝統文化の芸や技の伝承・継承と、その「学び」のスタイルは、それぞれの地域や文化の中で育まれるものである。伝統文化の伝承・継承は、町づくり、人づくりという観点から、全国各地で行われている。しかし、そうした観点からだけではなく、伝統文化に携わる人びとの間で、伝承・継承がどのように行われてきたのか、その独自の「学び」のスタイルはどのようなものか、また、「学び」のスタイルの変化は、芸や技の伝承・継承に何をもたらすのか、ということにも注目していきたい。このような地域、文化に根づいてきた伝統文化の伝承・継承における「学び」のあり方を理解するということは、様々な形で伝達される知識の有り様を知ることになり、学ぶということそのものを捉え直すことになる。そして、様々な形で伝達される知識、その「学び」のスタイルは、新しい知識と新しい「学び」を見いだすことにもなるのではないだろうか。

③ 「京都・学びの文化」体験ツアー企画・参加の体験から

人見麗子

社会教育学会に先立ち、会員の方々に「京都の伝統文化に触れていただくことができれば」という趣旨のもとに「京都・学びの文化」体験ツアーが企画され、スタッフに加わった。

今回企画された中でも、花街や菓子作り、京友禅は、京都生まれの京都育ちの私にとっては、生活に密着していたように思われる。なぜなら、北野天満宮界隈を遊び場に使っていたために、

上七軒は学区こそ違え、子どもの頃からのなじみの場所である。舞妓さんの姿をみて家路に急ぐこともあった。また、自宅前が京菓子老舗の店舗で子守をしながらガラス越しに菓子作りを見ており、出来上がっておじさんの説明を聞くことがとても楽しみだったし、菓子博も早くからみてその技に感嘆していた。友禅は、堀川の川の色の変化や鴨川の友禅流しを綺麗な風物として育ってきたからである。

京都育ちとはいえ、約30年間東京で仕事をしていたために生粋の京都人といえないかもしれないが、京都のこのような伝統文化はみなさんに触れていただきたいと考え、この企画の準備に喜んで参加したものである。

一番の心配は、学会前日の企画のために参加者が集まるかということであった。以前、学会当番の時、学会終了後各所に分かれて、希望者を案内するという企画はされたことがあったが、このような規模での企画はなかったのではなかろうか。二番目の心配は、京都の交通事情を知っているために、予定通りの行程が時間通りに実施できるかということであった。大型バスでなくマイクロバスのほうがよいかもしれないと考えたこともあった。

最大の効果を上げるには、準備が第一ということでスタッフは何回も見学先に足を運び説明していただく方との接触を重ねた。当初はとまどわれた方たちも次第に私たちの趣旨に賛同頂き、当日は予想外に和やかな雰囲気の中で見学できたことは望外の喜びであった。また、予定通りに実施できるかということについては、事務局のご配慮もあり無事に終えることができ安堵したものである。

特に印象に残ったことは、一見華やかに見える花街「上七軒」では、途中脱落者があると聞き及んでいたが、現代っ子が舞妓になるために日々の礼儀作法や芸の稽古に精進しているその積極的な学ぶ姿勢であった。また、歌舞練場の見学では操作がすべて手作業で行われており、機械化が進む昨今、重労働と思う反面極め細かな操作の可能性を伺うことができた。菓子工房では、菓子職人に必要なのは単に経験を積むという修業年月だけでなく、茶道や華道の心得であることを知り、菓子博の芸術性はこのようなところから生まれているのであろうと納得できた。また、友禅も多くの工程を経ての完成品であり、個々に携わる人々の「技」の伝承のあることを学んだ。しかし、「勘」の世界もあり、この「勘」の伝承は可能であろうか？ 難しい問題を残しているように思われた。

伝統文化の伝承は、「口伝」、「先輩の技をぬすむ」「形から」「まねる」「体で覚える」などさまざまな「学び」の形態があろうが、かつての「住み込み」は陰を潜め「学校形態」に移行したりするなかで、伝承者と継承者の熱意のようなものが必要ではないだろうか。国の内外を問わず、地域には伝統文化があり、様々な形で伝承されてきている。その伝承方法が多様化すればするほど両者のバランスが望まれることを痛感した。

子どもの頃の体験は、現象として捉えたごく表面的なものであったが、今回の経験は人々との関わりや学びの実態から、伝統文化が息づいているいわば、裏面を感じ取ることができた。

今回の企画は、時間の制約もあり参加いただいた方に京都の伝統文化をゆっくり味わっていただくところまではいかなかったかと思うが、これを契機に理解を深めていただくと嬉しく思う。学会開催を機会に伝統文化の伝承方法など地域独特のものを会員に紹介していただく企

画が今後続くことを期待するものである。

④ 日本社会教育学会研究大会「京都・学びの文化」体験ツアーに参加して

齋藤 佳津子

このツアーを企画立案するに先立ち、京都大学大学院生涯教育学講座「学びの文化研究会」は、2004年の3月にフィールドワークを行った。これに参加して、関心の深かったいくつかの点について、掘りさげて考える契機にするべく、この体験ツアーの企画を担当させていただいた。

また、筆者自身は、NGOで活動を行うにあたって、西洋的な学びの様式である「ワークショップ」を「ファシリテート」する役割を多く担ってきた。しかし、日本の、それも京都という地において、地域に根ざす活動を行うに際し、ローカルな知を無視し、西洋近代的な物差しだけで今後活動を展開できるのであろうかと疑問をもっていただけに、この「学びの文化体験ツアー」に参加し、関係者の方々から意見を聞くことで、大切な示唆を得た。

筆者自身の関心事項は大きくわけて3点あった。第一は、2004年3月のフィールドワークで「染色業」に関する工場や職人宅を訪問の折に、多くの方が語る「学び」の大系や様式には共通するものがあり、それは他の日本の伝統文化・産業に携わる人達も同じような「学びの様式」が当てはまる点。第二は、その「学びの様式」の中には、教える側／学ぶ側が長くにわたり伝承してきた「なにか」があるのではないかという点。そして第三は、その教える側／学ぶ側の構図や学びの様式はこの数十年で変わってきたのではないかという点であった。

第1点目の「学びの様式」には、染色業や製菓業、また芸妓養成の各種の芸道（鳴りもの、踊り、唄など）にも同じような様式——学ぶ側が教える側を「真似する」ことから始まり、「型を身につける」ことを重要視することが伺えた。それは教える側が「お稽古をつける」（または学ぶ側が「お稽古をつけてもらう」という表現からも理解できる。その中でもたいへん興味深かったのは、様々なレベルのものが一緒に同じ演目を練習する風景であった。現代の習い事やカルチャーセンターでは「レベル別／習熟度別」というのがほぼ当たり前になっているが、踊りや長唄の練習風景では、先輩／後輩が一堂に集まり同じ演目を練習する光景に注目した。このツアーの企画段階で訪れた長唄の練習風景では、稽古の終わりにお師匠さんにお礼を述べた後に先輩の舞妓に向かって、「おねえさんおおきに」と後輩の舞妓が挨拶している場面を見せていただき、お師匠さんからだけでなく、先輩からも「学ぶ」姿勢を重視していることが驚きでもあり新鮮であった。

また、2点目の教える側／学ぶ側が伝承してきたことのなかで興味深かったのは、ツアーの当日我々の前で話をしてくれた地方出身の舞妓の梅ちかさんの「お師匠さんから放っとかれんように一生懸命練習する。放っておかれたらおしまい。」という一言であった。その言葉から伺えるのは、「教える側」が「学ぶ側」を自立した個人と認め、厳しい態度で臨んでいることが表れている。それは裏返すと「教えてあげよう」「引っ張りあげてあげよう」「後ろからそっとサポートしてあげよう」というものではなく、「学びたいのであれば自分で考えてついてきなさい」という態度の表れであり、そのことは、「学ぶ側」の自主的に学ぼうとする意欲や姿

勢を大きく変えるものでもあると感じた。

最後の点である、学びの構図や様式の変化は、俵屋吉富の京菓子ギルドハウスの製菓職人の方と雑談していた時に伺えた。この数十年で「職人の仕込み方」が大きく変わったと指摘されていた。このことは「伝統産業の専門学校化」の流れとも相通じる流れであり、今後この部分に関しては一層の研究が必要になってくることと思う。現代社会の中でこれらの伝統産業を教える場所で何が変化してきたのか、その外的要因を探り、これからの生涯学習や成人教育の中で、ローカル特有の様式や構図を考えることは非常に興味深い。

最後になったが、今回の「学びの文化ツアー」でお世話になった関係者の皆様に深く御礼申し上げると同時に、筆者自身がこの領域の研究で、今後益々深く考察し、新たな理論を筋立てていくことへの必要性を切に感じたことである。改ためてこの体験ツアーの企画に参加したことに深く感謝申し上げたい。

⑤ 「京都・学びの文化」体験ツアーから、日本における「学びの様式」を考える

渡 邊 洋 子

「京都・学びの文化」体験ツアーの企画・準備・実施の各段階は、私自身にとっては、フィールドワークの過程そのものであった。公開シンポジウム報告「学びの様式と伝統文化」（本誌65ページ参照）でも触れたように、「京都」は、日本の「伝統文化」を凝縮した形で伝承・継承してきた土地柄であり、ある意味で象徴的な「場」である。そのような「京都」の文化土壌のもとで、「伝統」として伝えられ、引き継がれてきた様々な事からや価値において、次世代や他者に「伝える」「引き継ぐ」営みは、どのように行われてきたのか、またそこでの問題点や課題はどのようなものなのだろうか。さらに、それらは今後、どのような方向に展開されていくものなのだろうか。

事前に、いくつかの場所をお訪ねし、ツアーの趣旨をご説明する際に、予備知識や打ち合わせの一環として、各々の「学びの文化」とその「伝承」「継承」の実際についてお話をうかがった。その中で、ツアーに関わっての収穫は、a. 京都の「伝統文化」に象徴される伝統的な日本の「学びの様式」（以下、仮に日本的「学びの様式」とする）を定式化するための示唆が得られたこと、b. 「学区制」を手がかりに、京都の教育的風土と地域性について認識を深められたこと、c. 京都の「ものづくり」とそれに伴う「学びの文化・伝統」の現状と課題、展望に関わる示唆が得られたこと、であった。以下、aを中心に若干の考察を行う。

第一の収穫（a）について重要なのは、それらが、近年その成果に触れてきた欧米の成人教育・学習のありようとはかなり異なる様相を持つということである。齋藤報告と重複する部分もあるが、先の友禅染に関わるフィールドワークや「学びの文化研究会」でのこれまでの成果も踏まえつつ、このツアーへの関わりから私なりに抽出した日本的「学びの様式」について、欧米の「成人教育」「成人学習」にも言及しながら、5項目にまとめてみたい。

ア 学ぶ者はまず、挨拶やマナーを含め、学ぶ者としての日常的な心構えや姿勢をもつことを求められる。

上七軒の梅ちかさんは、京都に来て以来、お茶屋に住み込み、「おかあさん」から「舞妓」としての礼儀作法や立ち居振る舞いを日々、厳しくしつけられてきた。もちろん、これはお客や仕事上世話になる人たちに対してのみならず、踊りや唄、三味線などのお稽古の場におけるお師匠さん（先生）や、同じ場で「稽古をつけてもらう」「お姉さん」（姉弟子）たちと接する時にも、重要なこととみなされる。また、「稽古をつけてもらう」＝「学ぶ」者には、「お師匠さんに見放されないように」必死に自己研鑽する態度が、暗黙の前提として求められる。

このように、日本的「学びの様式」においては、「学ぶ」者にはまず、「作法」や人間関係における礼節、日常的な所作や態度など、一見、学習内容とは直接関わりのないように見える事がらが求められる。そのような「学ぶ」者としてのありようや意識こそが、より深い学習内容の習得につながるという考え方にたつものと思われる。一方、「成人教育」「成人学習」の文脈の中では、学習者個人の社会的スキルの習得や学習場面の中での教育者—学習者、および学習者相互の関係性が取り上げられることはあるが、学習の場をいったん離れた学習者の日常場面での立ち居振る舞い、日常的な所作や意識にまで言及することはまれである。

日本的「学びの様式」においては、「学ぶ者」の自覚や態度への要求は、「道」（茶道・書道・柔道など）と呼ばれる領域では、さらに厳しいものとなる。単なる知識や技能の獲得ではなく、その知識や技能が依って立つ哲学的基盤を獲得することが重視され、「学ぶこと」と「生きること」が一体化したものと受け止められる。「学び」を極めることは、同時に、人生を極めることと見なされており、「学び」が学ぶ者の生き方やありように大きな影響を及ぼしていくのである。

イ 教育者が「教える」のでなく、学習者が自分で対象と向き合うことが基本である。

「稽古をつける」は、決して手取り足取り「教える」ことを意味していない。上七軒の事前訪問で見学した三味線の「お稽古風景」では、師匠のかけ声で、全員が一曲を最初から最後まで何度か繰り返し、全員で合わせて演奏していた。演奏中、師匠は一人一人の演奏を、目と耳で確かめるように見ながら、適宜、声をかけたり、曲の感じがつかめるように曲に合わせて旋律を歌ったりしていた。途中、集中していない者に自覚を促す言葉がけはあったが、個々の間違いやずれなどで演奏を停止したり、同じ箇所を繰り返したり、それらに一々言及したりすることは無かった。飽くまでも、曲の流れや音の運びを身体で受け止め、間違いやずれは本人が気づいて直していくことが基本になっているように思われた。

これは、職人の世界でも同様である。先の友禅染工場でも、ギルドハウスでも、西村屋でも、親方は弟子に「教えない」のが基本である。掃除や簡単な作業を重ねながら、親方や先輩の「わざ」を「盗み」「真似」し、試行錯誤を重ねることで、「一人前」になってきたと異口同音のお話を聞いた。そこに共通するのは、他者が「手取り足取り」教えたのでは、知識や技能を真に習得することできない、自分が直接に対象に向かい合って格闘してみて初めて、真に学ぶことができるのだ、という学習観だと思われる。かつて「住み込み」が常態化していた「奉公」

や「修行」の中で、親方や師匠は、自らの私的な生活空間に職人や弟子を招き入れ、家事や雑用をさせる中に「教育的意図を埋め込んで」、厳しい姿勢やプロ意識を培おうとした。弟子は、炊事や掃除に加え、仕事の補助などを担う中で、親方のモデルから、対象への取り組み方を学び取ったのだとも言えよう。

20世紀初頭以降、「成人教育」という言葉が自明視されてきた欧米でも、1970年代にマルカム・ノールズらによって‘Self-Directed Learning’（自己主導型学習）が提起され、学習者主体の学習への取り組みが盛んになった。さらに、EUの生涯学習政策の影響などから、近年は欧米でも、「教育」より「学習」の方に軸足が移ってきた。だが、成人教育者が必要とされなくなったわけではない。むしろ、「成人学習」の場には、「学習支援」者として様々な形で学習者をサポートする「成人教育者」が不可欠なものに見なされていることが多いのである。これらを踏まえ、さらにあと3点挙げてみよう。

- ウ 学び方では、型を身体で覚え込むことが重視される。
- エ 個々の学ぶペースや学び方の違いが尊重される（おとな、子どもの区別は特にしない）。
- オ 「弟子－師匠（親方）」は、「学び取る－見守る」を基本とする継続的な関係性を構築する。

この3点は、前記の「お稽古風景」からも、顕著に読みとれる。

ウについてはすでに、茶の湯や能などの研究において、日本の伝統文化の特徴として、しばしば指摘されてきた。職人の仕事においても同様である。一見、単純に見える初歩的な作業が修得が、すべての「わざ」の基本となるのである。京菓子づくりにおける「餡の炊き方」のように、代表的な「わざ」の習得には、数年を要することも知られている。そこでは、模範となる「わざ」を徹底して模倣すること、すなわちその「型」を徹底的に内面化し、正しく再生できるようになることが、オリジナリティに先んじて重視される。このような取り組み方は、技能面の修得に留まらず、例えば、教養分野での「暗記」や「音読」など、「体で覚える」学び方にも見ることができよう。

エについては、「おとな」＝アンドラゴジーと「子ども」＝ペダゴジーのような、年齢や世代による指導上の考え方の違いがないことが、欧米の学習観と対照的である。むしろ、「覚えの早い人」「じっくりと取り組む人」「飽きやすい人」など一人一人の態度や取り組み方の個性が重視される。学ぶ者の主体的な取り組みと日常的な態度は、年齢や世代にかかわらず、学ぶ者自身が、その領域で専門的水準に近づこうとしていればいるほど、より一層、厳しく求められると言える。

オについては、近代学校教育的な価値観のもとでの「教える」－「教えられる」の関係でもなく、成人教育的な「教える」/「学ぶ」の関係でもない点が注目される。現代においても、多くの場合、師匠や親方は、弟子に学びの心構えやその道の厳しさなどを伝え、礼儀作法や日常的な所作などを指導する立場にはある。とはいえ、昔ながらの「徒弟制」が崩壊した現代では特に、学ぶ者（弟子）自身は、いざとなれば、この両者の関係性を解消できる選択肢を持って

いるのであり、この関係は、飽くまでも、学ぶ者の主体性が前提となるのである。

「師匠」「親方」はそこで、学ぶ者＝「弟子」が対象に主体的に取り組んでいるか、またその学びが望ましい方向に向いているかを見守り、求めと必要があれば、助言やサポートをする存在として機能するのである。これは、「成人学習」「成人教育」における学習援助者の役割とかなりの点で共通すると見られるが、根本的な違いが存在する。ここでは飽くまでも、「見守る」ことが基本なのであり、「成人教育者」のような「学習援助」は、必要が生じた場合の最小限に限られる。またそこでの「援助」の内実は、「学習援助者」の行動として何が望ましいか、という発想ではなく、その領域でやっていく上で、「本人（の学び）にとって何が望ましいか」という発想に基づいて判断されるものなのである。

本ツアーへの関わりによって得た第二の収穫（b）は、現在の京都の人々の「学区制」への思いやこだわりについて、歴史的事実を通して理解を深められたことである。「学校」というものの意味合いや重みが他の地域とは異なる点が、地域教育や生涯学習のありようを考えていく上で考慮すべき、かなり重要な要素となっている点に、今後とも注視していきたい。

第三の収穫（c）は、京都を足場とする「ものづくり」の現状と課題、そしてその展望に至るまで、実際に職人の方からお話をうかがうなかで、リアリティをもって考えられるようになったことである。特に、自らが体験工房を主宰する西村さんのお話には、色々と刺激を受けた。「ものづくり」しかやって来なかった職人が、時代状況の変化の中で、自営業者として経営に携わらねばならない立場となったこと、そこで、どうしたら客が来るか、どうしたら経営が成り立つかを暗中模索し、その試行錯誤の中で、各種の情報や知識を得たり、ネットワークをつくったり、情報発信のノウハウを手に入れたりして様々な資質や能力を身につけていったこと、これからは、京都ならではの「ものづくり」と町屋を活かした「まちづくり」をうまく組み合わせながら、新たな取り組みをしていくつもりであること、とはいえ、前途はなかなか多難であること、などである。今後は、このようなマクロな観点をももちながら、アプローチしていけたらと考えている。

〔謝辞〕

末筆ではありますが、今回のツアーの実施にあたり、たくさんの方々に、本当にお世話になりました。準備や交渉、参加者募集などのプロセスで、行き届かないことや改善点も多々ありましたが、当初の予想以上に多くの成果や収穫を得ることができました。これも訪問先の関係者の方々のご理解・ご協力とご厚意の賜と幸いです。改めてどうもありがとうございました。合わせて、ツアーに参加して下さった方々、多方面でバックアップして下さった日本社会教育学会常任理事会、同研究大会事務局・同実行委員会の各位、そしてスタッフの皆さんに心より感謝いたします。